

科研費研究「多様な資料の活用に対する教諭の認識に関する研究」最終年度報告

中村 百合子（立教大学准教授）

はじめに

2010 から 2012 年度の 3 年間、科学研究費補助金（若手（B））を「多様な資料の活用に対する教諭の認識に関する研究：モロッコでのアクション・リサーチ」に対していただいた。昨年度はその中間報告をしたが¹⁾、今年度は最終年度として、行った研究の概要を報告したい。

昨年度、モロッコ王国での調査実施に、アラブの春の影響等から、大きな困難が生じて、インドネシア共和国で調査をはじめたことを報告した。ただ、モロッコでも、一度訪問して簡単な予備調査を行なうことはできていたので、インドネシアという調査地を加える判断の背景には、2 か国での調査をいくらかでも比較・対照させ、両国の最大の共通点である「ムスリムが多数派を占める地域」での学校図書館開発援助モデルという見方が可能か、ひいては、イスラーム圏のための普遍的な学校図書館開発援助モデルという見方は可能か、という新たな挑戦的な問いを考えていた。もちろん、モロッコとインドネシアには表 1 に示すように異なる点も多いが、人口の多数派がムスリムであることは共通している。モロッコではイスラーム教は国教である。インドネシアには世界最多という約 2 億人のムスリムがいるとされるが、同国では一神教への信仰が原則となっているものの、信教の自由は保証されている。そこで、本研究では、プサントレン、つまりイスラーム寄宿学校から調査への協力を得ることとした。まだ、イスラームと学校図書館について関連づけた考察はそれほど進んでいないのだが、本稿では、以上のような方向性と趣旨とで進めた研究の今年度の進展について、報告する。

表 1 モロッコとインドネシアの概要（注釈の無いデータはすべて世界銀行（2011）による²⁾）

	モロッコ王国	インドネシア共和国
人口 ³⁾	3 千 264 万 9,130 人 (2013 年 7 月推計)	2 億 5116 万 0,124 人 (2013 年 7 月推計)
政体 ⁴⁾	立憲君主制	大統領制、共和制
宗教 (%)	イスラーム 99, キリスト教 1, ユダヤ教 (約 6,000 人) ⁵⁾ ; ムスリムはスンニ派がほとんど ⁶⁾	イスラーム 88.1, キリスト教 9.3 (プロテスタント 6.1, カトリック 3.2), ヒンズー教 1.8, 仏教 0.6, 儒教 0.1, その他 0.1 ⁷⁾
民族 (%)	アラブ人 65, ベルベル人 30 ⁸⁾	ジャワ人 40.6, スンダ人 15, マドゥラ 3.3, ミナンカバウ族 2.7, ベタウィ人 2.4, プギス族 2.4, バンテン人 2, バンジャール人 1.7, その他または特定せず 29.9 ⁹⁾
言語 (%) ¹⁰⁾	アラビア語 (公用語), ベルベル諸語 (公用語), フランス語	インドネシア語 (公用語), 英語, オランダ語, ジャワ語等
出生率 ¹¹⁾	2.2	2.1
出生時平均寿命 (年)	男性 69.9; 女性 74.5	男性 67.7; 女性 71.1
初等教育の就学率 (%) ¹²⁾	113.7	118.1 (2010)
青年 (15-24 歳) 識字率 (%) ¹³⁾	男性 86.7; 女性 72.1 (2009)	男性 99.6; 女性 99.4 (2009)
成人 (15 歳以上) 識字率 (%)	56.1 (2009)	92.6 (2009)

1. インドネシアの見習い教師と生徒に協力を得ての調査の実施

1.1 調査の概要と経過

モロッコでの調査は根本から変更することとなったが、多様な観点から書かれた資料の学習・教授への活用に対する認識についての調査は、インドネシアのプサントレンの見習い教師と生徒とに協力を得て行うこととした。ここで一般の教諭を調査協力者として得ることにしなかったのは、調査者の側の判断で、その理由は、昨年度にプサントレンを訪ねた際、いずれの学校でも、出会った現任教諭たちがすでに教え方について信念をもっているように見えたことによる。訪ねた、Gontor という巨大な総合学園が、独自の教育方法を確立しているということと思われた¹⁴⁾。そこで、まだその教育方法を実践する側に回って間もない見習い教師と、学び手の側である生徒とに、本調査に協力してもらうこととした。

予算の都合から調査協力者は2名とし、Gontor Putri I という女子校から見習い教師（同校の卒業生で後輩を指導しており、現役大学生でもある）と、Pondok Pesantren Pabelan という Gontor 学園の系列校の女子生徒に協力を仰ぐこととした。それは、昨年度の本誌で報告した訪問時の印象から、Gontor の本校である男子校は細部に至るまでかなり徹底して、同校の教育方針に基づいて運営されているように見え、変化に対しては Gontor Putri と Pondok Pesantren Pabelan の2校の方が可能性をもっていると感じたことによる。また、Gontor Putri I に協力を求めることとした時点で、調査のために来日してもらう際に、行動を共にするのが同性であることがイスラームの文化を考えるとより望ましいと考えられたため、Pondok Pesantren Pabelan は共学であるが女子生徒に協力を仰ぐこととした。

調査は次の2部で構成することとした。

調査1) ジャカルタで大型書店と Islamic Book Fair を訪問しての調査 (2012年3月10, 11日)

調査2) 日本で東京の学校図書館と国立国会図書館国際子ども図書館を訪問しての調査 (2012年5月28, 29, 31, 6月1日)

調査協力者は、研究の趣旨を説明して「敬虔なムスリムの女性。今回の来日が与える影響の大きさを期待できるという意味で、外国に渡った経験の無い者が望ましい」という希望を伝え、所属校の校長にそれぞれ1名ずつを推薦してもらい、Gontor Putri I の見習い教師のHさんと、Pondok Pesantren Pabelan の高校1年生のIさんをお願いすることとなった。Hさんは、1989年7月生まれのジャワ人で、実家は中部ジャワ州テマングン(Temanggung)にあり、同地で1993～1995年に幼稚園、1995～2001年に小学校に通った。そのあと、2001年から2007年まで全寮制のGontor Putri で中等教育を受け、2007年にGontor 学園の系列大学で、ポノロゴという東ジャワの町にあるGontor 本校(男子校)に隣接した、Darussalam Institute of Islamic Studies という高等教育機関に入学してイスラーム思想を学びながら、母校のGontor Putri に併設される教員養成学校にも所属し、後輩の指導にもあたっている。一方、Iさんは1997年4月生まれのジャワ人で、実家は中部ジャワ州ウォノソボ(Wonosobo)にあり、同地で生まれ、小学校を卒業して、中等教育を受け、Pondok Pesantren Pabelan に入り、寮生活をはじめた(同校は近所に家があれば通学することもできると聞いた)。生徒による図書委員会の委員長を務めている。

彼女たちに、上記のジャカルタでの2日、日本の東京での4日の調査に参加、協力してもらった。この間、近代の学校図書館研究の成果をふまえた問いかけ、働きかけを調査者側から行いながら、多様な資料の活用による多元的な価値と文化への理解を児童・生徒に促す教育活動に対する、見習い教師と生徒の反応と認識の変化を記録した。一方で、調査

協力者の2名には、調査中の旅費、滞在費に加えて、デジタルカメラとスクラップブックを渡した。そして、学校に戻って、主として日本での経験をまとめた、多くの写真を入れたスクラップブックを作成・提示して、他の生徒、教師らと話し合っ、よりよい学校図書館運営について考え、みなが合意してできそうなことがあれば実際に彼女たちの学校で行ってみよう、依頼した。その際、そうした成果を1年後に調査者が訪問して確認、あらためて調査協力者らにインタビューを行う予定であると告げた。ただ、最後の部分は、予算配分の都合から最終的には、調査協力者から報告書とスクラップブックを調査者に送ってもらうことにした。この一連のアクション・リサーチをとおして、インドネシアのイスラム系学校の教育における多様な資料の意義を問い、開発途上国に対する学校図書館開発援助モデルを探究した。

1.2 調査の計画の背景

この調査に着手した背景を改めてここに示すと、開発途上国における図書館開発は、米国や日本などのNGOがその多くを担ってきたということがあった。近年、米国のNGO組織のBook Aid InternationalやRoom to Read、日本の社団法人シャンティ国際ボランティア会¹⁵⁾の活動が、開発途上国の農村部に図書その他のメディアを提供したり、特に子どものための図書館建設を行ったりする民間の開発援助を行って、注目されている。ただ、そうした援助活動の一部に、少なくとも初期には、児童書の送付と図書館の建設を先行させ、おうおうにして事後の客観的な評価と反省の作業が不十分なものがあるとも言われてきた。そこで近年、重要性が認識されるようになってきたのが、現地の当事者の「住民自身が自分たちの地域の課題を発見して、その解決に向けて行動を起こせるように外部から支援するタイプの開発」である「参加型開発」への、過去の慈善型開発や技術移転型開発からの移行である¹⁶⁾。また、開発援助に関わる者自身がリサーチを行う、自らの活動に対してクリティカルな視点をもつことの重要性が認識され、そのための試みが始まっている（例えば、大阪大学グローバルコラボレーションセンター(Global Collaboration Center: GLOCOL)の国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: JICA)の派遣職員の養成への関与はこれにあたるだろう)。筆者は、この2つの基本的態度・アプローチが重要であると考え、それらを基盤としながら図書館開発援助のより有益なあり方を、本研究をとおして模索したいと考えた。

先行研究を見ると、教育開発援助のあり方については、田中治彦などが精力的に研究成果を発表しているが、図書館開発援助については、日本ではそのあり方をクリティカルに問い直す作業はいまだにほとんど行われていない。雑誌で2度、関連の特集が組まれた程度である¹⁷⁾。一方で、英語では、開発途上国での図書館支援についての研究はいくらか書かれてきており、それらを整理したレビュー論文が発表されている¹⁸⁾。それにおいても紹介されているが、図書館へのアクセスの民主化が各地に伝えられてきたという見方だけでなく、意識的にまた無意識的にアングロサクソンの伝統から図書館の発展が宣伝されてきたといった見方からの、過去の図書館開発援助の評価がある。さらに、近年は、資料・情報のデジタル化や情報のマネジメント、社会関係資本と図書館といった新しい観点から、開発途上国の図書館について議論する論考がみられるようになっているが、それらは開発援助との関わりからはほとんど検討されていない。本研究では、開発援助一般とまた教育開発援助、図書館開発援助に関する、以上のような近年の議論をふまえ、開発途上国における学校図書館の開発援助では過去に行われたことのないアクション・リサーチを試みたいと考えた。

1.3 調査の実施とモデルの探究

ここでは、実施した調査の概要を報告し、さらなる研究課題と調査者が現時点で認識していることについて述べておきたい。調査協力者には、学校図書館の充実のための活動に役立つと思われる経験を積んでもらうことを意図して、調査者と共に、次のスケジュールで行動してもらった。ジャカルタでは、10日および11日の終わりには、調査者によるインタビューを受けてもらい、調査者作成の質問紙を記入してもらった。調査の趣旨を理解し、自らの行動に自覚的になってもらうための簡単なもので、その目的は達成されたと思われた。ただ、この時点で、Iさんはまだ幼く、経験、語学力が、特にHさんと比べるとかなり不足していることがわかった。性格的にも、Hさんの方がずっと外交的で積極的な方と思われた。しかし、二人には、それぞれが調査協力者として、それぞれの意見をきちんと述べて欲しい旨を伝えた。とはいえ、慣れない外国でHさんにはいくらかの配慮、場合によっては保護が必要であると感じたため、滞在費を手渡す際に、Hさんに増額をしてそれを依頼し、またそのことはIさんにも伝えた（金額の比率はHさん6対Iさん4とした）。最終的に、Iさんに対するHさんの働きかけは、帰国後に、IさんとIさんの所属学校からの連絡が無くなった際に、Hさんが根気強く、大変な責任感をもって連絡をし続けてくれたときに、調査者にはもっともありがたく思われた。2013年3月末現在、Iさんからの報告書とスクラップブックは未着だが、Hさんからのメールによれば、すでにできあがっているとのことで、送られてくることを筆者は待っているところである。これが届き次第、各種の記録とともに、あらためて、今回の調査の記録を分析したい。

表2 ジャカルタでの調査協力者のスケジュール

2012年3月10日（土）	ジャカルタ着；大型書店 Gramedia（ジャカルタ中心部の Grand Indonesia ショッピングモール内）訪問
2012年3月11日（日）	Islamic Book Fair (http://www.islamic-bookfair.com/) を訪問
2012年3月12日（月）	在インドネシア日本国大使館にて日本訪問のためのビザを申請；ジャカルタから学校に戻る

表3 日本での調査協力者のスケジュール

2012年5月28日（月）	来日；午後には渋谷教育学園渋谷中学高等学校を訪問
2012年5月29日（火）	午前には東京学芸大学附属大泉小学校；午後には東京学芸大学附属国際中等教育学校を訪問
2012年5月30日（水）	休日
2012年5月31日（木）	国際子ども図書館を訪問
2012年6月1日（金）	東京都荒川区にて第一日暮里小学校、諏訪台中学校、峽田（はけた）小学校を訪問；荒川区教育委員会指導室学校図書館支援室を訪問
2012年6月2日（土）	離日

ここで、調査者がこの間、協力者との会話についてとってきた記録に基づいて、現時点までに認識している、今後の検討課題を整理しておこう。

- ・「科学」観と知の世界観の相違：彼女たちに対して図書館や教育の開発援助を行いたいと考えるときに重要と思われたのが、ひとつめに、彼女たち、特に見習い教師のHさんがしばしば「Islamic Science」と呼んだものと、当方が考えている近代科学が異なっ

ているということであった。仮に「援助」を当方が行うとしても、イスラーム黄金時代にさかのぼるイスラームの学芸の伝統を理解し、尊重しなければ、例えば図書を送ったとしても、興味深く手にとってもらえるのははじめのうちだけということになりかねないのではないかと思われた。この、「科学」観と知の世界観の相違と、出版文化にそれがいかに反映され、学校図書館の知に反映されるか、されるべきかについては、今後の検討課題である。また、「Islamic Science」を背景とするだろう彼女たちの学校のカリキュラムとの関係も、当然、考慮しなければならない。

- ・国際理解教育のあり方：単純な興味という意味では、むしろ彼女たちの学校の伝統では重視されていないらしいもの、例えば地理や国際理解といったテーマの写真を多く含んだ図書は、彼女たちの学校の授業ですぐに使うとは考えられないと言いながらも、インドネシアではあまり見たことがなく、学校の図書館に送られたら興味をもつ生徒はいるだろうというような反応であった。ただ、開発援助の研究の一環で尋ねているということもあるのか、たいていのものについて、「いただけるのならばいただきたいです」という反応を示すようにしている傾向が、彼女たちに限らず、私がこの研究プロジェクトで出会ってきた現地の人たちにはあって、このようなやりとりが、いると言っているからととにかく物を送ってしまう、そしてしばらくしてふたたび行ってみると使われていないという展開を招いているのかもしれないと感じた。「いると言っている」によってニーズを把握することの危うさを感じた。しかし、日本の学校図書館で、総合的な学習の時間や社会科の、とくに国際理解をテーマとした児童・生徒の学習成果物が掲示されていると、二人はよく眺めていて、似たようなものを見たことは無いと述べた。そうしたテーマをもっとインドネシアの子どもたちも学ぶべきなのか、と考えたようであった。いっぽうで、日本の国際理解教育が世界的にみるとひょっとしてなにか特殊性があるのかとも、調査者の側は考えさせられた。
- ・「実用書」のニーズの取り扱い：彼女たちの学校では、手芸や家政に関する図書に関心をもつ女子が多く、高いニーズが見込まれることを彼女たちは述べると同時に、日本で訪問した学校図書館では、日本語という見知らぬ言語でも図や写真が多くてわかるような気がするということもあるのか、そうした図書は興味深そうに覗いていた。全寮制の学校ということがあるのか、実用書を学校図書館に期待するような発言が聞かれた。
- ・フィクションの取り扱い：文学、ライトノベル、漫画等は、言語の壁があり、そのニーズの把握や妥当性の判断がもっとも困難であった。実用書に加えて、ライトノベルや漫画が人気であることは、調査者のプサントレン訪問時に子どもたちの発言で明らかになっていたが、教員たちの反応は肯定的ではなく、中には「女性は小説を読むべきではない」と述べる男性管理職もいたりして、学校図書館開発援助のコレクション形成においてひとつの重要な論点になると思われた。良書とは何かという問いは議論が尽きないが、(おそらくフィクションについてもっともそうだろうが)その地の言語を知らない、議論の手がかりすらないのだということが痛感された。

さて、学校図書館開発援助のモデルの探究としては、インドネシアのプサントレンに調査協力校、協力者を得ることとなり、最終的に見習い教師と生徒に調査協力を依頼した時、仮説モデルとして、次のようなことを考えていた。それは、若く、海外経験が無く、教授経験の多くない教師や、生徒の代表が他の文化での新鮮な経験をもち帰って、学校になんらかのポジティブな変化を彼女たち自身がもたらすというもので、そのようなモデルの妥当性を各種の記録から検討したいと考えていた。

しかしこの仮説モデルで実際に調査を実施してみると、今回の調査協力はいわゆる留学経験を与えられたものと彼女たちには理解されたいことが、帰国後のHさんとIさんの様子から感じられてきた。メールでのやりとりを継続できたHさんが感謝を繰り返し述べてきたのは、彼女が個人として今回、来日がない、得られた経験についてであった。そしてなんと彼女は2012年9月にGontor Putriを離れ、もうそこで教えてはいないということメールで連絡してきた。その際の様子、スクラップブックが完成しておらず、調査者が期待していた、学校のその他の生徒や教職員との彼女の日本での経験の共有がじゅうぶんに行われていない状態で同校を離れることに、まったく問題を感じていないように調査者にはみえるものであった。一方で、Iさんだけでなく、Iさんの所属学校とのコミュニケーションが、Iさんの帰国後にできなくなった。そのことに、帰国後の行動こそが調査協力なのだという認識をしてもらえていなかったのではないかという思いを調査者は抱かざるを得なかった。このような経験を経て、調査者は、少なくとも短期的に変化・成果をみたいと思うなら、若く、まだ責任ある立場にない見習い教師や生徒を連携の相手を選んで、彼女たちは立場からして帰国後すぐに強い影響力を発揮することはできるはずもないのであり、学校の代表として振る舞うと言っても限度があったのだと認識することとなった。もっとも、Iさんからの報告書とスクラップブックがまだ届いていないので、それが届くのを待って、改めてモデルについては考えることにしたい。

2. モロッコについての調査のその後

今年度、モロッコについては、2012年2月の訪問調査に現地の信頼できる人物から入手した資料のアラビア語から英語への翻訳を行った。この翻訳原稿を本稿に資料として付すつもりであったのだが、紙幅の関係で断念した。この文書を（日本語ではなく）英語への翻訳としたのは、英語での公開によってモロッコの図書館に潜在的に関心をもつより多くの人たちに読んでもらえる可能性を考えたからである。今回、翻訳をすることができた2文書のほかにも数点の資料を入手してきたのだが、予算の都合から、そのすべてを翻訳することはかなわなかったこともあり、現在までのところ十分な検討はできていない。しかし、モロッコの学校図書館史においてひとつの重要なできごとであったと思われる内容が書かれていると判断しているので、改めて、必ず公開したい。

これらの文書では、国立読書観測所（今回の英訳ではThe National Reading Observatoryとされている）の設立が提案されている。これらの文書を手渡してくださったモロッコ人によれば、左派政権の時代に図書館および学校図書館を発展させる政策が提案された、これらの文書はそのときのものということであった。左派政権とは、1998年から2007年までの人民勢力社会主義同盟（The Socialist Union of Popular Forces: USFP）による政権のことである。「観測所」とここで訳したのは、フランス語の「Observatoire」のことと考えているが、この響きに筆者は覚えがあった。2012年2月にスペインのバルセロナを訪問した際、バルセロナ大学に「L'Observatori de Biblioteques, Llibres i Lectura」という組織があって、その活動と成果について同大学の教授陣に話を聞いた¹⁹⁾。このときにも通訳の方が「Observatori」の訳語に困っていて、最終的に「観測所」でしょうか、となったのであった。一方、フランス共和国では1996年に「L'Observatoire National de la Lecture」が設立され、現在も活動しているようである。その目的は、学校教育を一貫して言語を習得することと、児童・生徒の間の読書活動を分析することに貢献するといったふうに、同機関のホームページには紹介されている²⁰⁾。この機関のフランスでの設立から学ぶかたちで、モロ

ッコでも提案があったのではないかと推測する。この文書に関わって、別のモロッコ人は、一般的に言って右派は国民のリテラシーが伸びることを望まない、と筆者に対して意見を述べたが、この発言には、よって左派政権が退陣した後の現在のモロッコでは、図書館の発展はほとんど望むべくもないという真意が隠されているように思われた。

今回の資料の翻訳は、レバノン共和国在住のフリーランスの翻訳家 Maria Kadi 氏に依頼した。Kadi 氏は、IFLA の「政府機関図書館のためのガイドライン」(Guidelines for Libraries of Government Departments) を英語からアラビア語に翻訳した方で、その翻訳作業を仲介した、レバノンの外務・移民省の司法センターおよび文書管理 (Legal Center and Documentation, Ministry of Foreign Affairs and Emigrants) の図書館長であり、IFLA の政府機関図書館分科会 (Government Libraries Section) の通信委員 (corresponding member) である Fatima Alloul 氏にまずコンタクトし、最終的に Kadi 氏に作業を依頼することができた。

まとめ

今回、3年間にわたって科研費をいただき、調査を実施して行く過程で、筆者は「学校図書館とは何か」を繰り返し問い直すことになった。「学校図書館」という概念を意識化していない人たちに会い、それを理解してもらおうとやりとりを重ねると、当たり前だと思っていたその概念が根本から疑われてくる。この経験は苦しかったが、このような揺さぶりを経験しない安全地帯からの開発援助はあり得ないのではないかと今、3年を終わって思う。過去の米国留学と占領期研究で、米国と日本でそれぞれ「school library」、「学校図書館」と呼ばれるものの相違について考えるようになっていたが、それがこの3年の間に、普遍的な価値が「学校図書館」という存在にあるのかどうなのか、という問いになって筆者の前に立ち現れているように感じる。

Rebecca Knuth は、産業化された国での学校図書館が、許容できる基準；効果的な職員配置と資格付与のあり方；政府の支持と財政的支援；説得力ある論理的根拠；専門職化に影響を受けているとした²¹⁾。また、同じく Knuth の研究に刺激を受けて、シンガポールの Lim Peng Han は、同国の学校図書館の発展について検討していると聞いた²²⁾。その際、Han は、義務教育の存在、地域の文学の伝統が現在まで受け継がれていることにも注目しているという。筆者は、彼らの議論に、特に開発途上国にも視野を広げるならば、さらに、(文学に限定しない) 出版産業の発展、また言論の自由の保障と教育へのその反映の度合いが、学校図書館の発展に重大な影響を与えることを指摘したい。出版産業の発展の影響という意味で言うと、モロッコの書店での観察によれば、少なくとも子ども向けの図書について、ほとんどのフランス語の図書はフランスから、またアラビア語の図書はレバノンやエジプト・アラブ共和国から輸入されているようである。資料に多様性が無いとは言えないだろうが、輸入されたものであるということは、文化的には読者との間に少なからぬ違いがあるだろう。また、少なくとも公立学校での教育はモロッコ独自のものであることを考えると、その教育といくらかは整合性のある資料が求められるのではないだろうか。一方でインドネシアの場合は、出版産業は発展しつつあり、多様な言論が著されているようだが、プサントレンの学校図書館となると、実際に行われている判断は保守的にみえた。今回の調査協力者のプサントレンは英語とアラビア語のバイリンガル教育を行っているが、昨年度の訪問の印象では、図書館(室)には必ずしも英語の図書は多いようにみえず、インドネシア語以外はむしろアラビア語の図書が目立っていた。とはいえ、それらはたいてい宗教関係書になるようであった。言論の自由の保障と教育へのその反映の度合いについては、

モロッコもインドネシアのプサントレンも、限定的であるが、王制であるモロッコの厳しさは、インドネシアの比ではない。プサントレンの中は、プサントレンであるがゆえに制限されているのであって、外には多様な、異なる価値観があり、それらが表現されている。

出版産業や言論の自由、はたまた教育のあり方は、一般市民また図書館専門職がそれらについて積極的に発言、行動してゆけば変えることができることとみることも可能だろう。ただ、この出版産業と言論の自由に関わる政治の問題は実際、かなりセンシティブで、その社会に帰属のない者が変えようとするのに対して、たいていは防御的な態度が示される。筆者はモロッコとインドネシアの学校訪問で、図書館が実は「ソフト・パワー」の攻防の場である²³⁾ ことに、教師は気づいていないわけではないと感じた。モロッコには、筆者が実際に目にしただけでもフランスと米国から図書や図書館の寄贈があって、両国の文化戦争の様相を呈しているようにもみえた。このような状況で、いわゆる外側から、どのような開発援助が可能なのか。自らの価値観も揺るがされながら、彼らの価値観を知るための努力を惜しまず、根気よく対話を続けたときにはじめて、彼らの力になることできるかもしれないという、そういう可能性が出てくるのではないかと思う。この後も継続して探究する予定の、学校図書館開発援助モデルは、この相互の「対話の継続」を軸とするものになる。

-
- ¹⁾ 中村百合子「科研費研究の進捗状況報告」『St. Paul's Librarian』No. 26, 2012. 3, p. 74-78.
- ²⁾ The World Bank. "Data," <http://data.worldbank.org/> <最終アクセス 2013 年 4 月 1 日>.
- ³⁾ データはアメリカ合衆国 Central Intelligence Agency. "The World Factbook," <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/> <最終アクセス 2013 年 4 月 1 日>による。
- ⁴⁾ 外務省「各国・地域情勢」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/morocco/data.html> <最終アクセス 2013 年 4 月 1 日>による。
- ⁵⁾ 前掲 3) .
- ⁶⁾ 前掲 4) .
- ⁷⁾ 前掲 4) . 2010 年の宗教省統計に基づくとのこと。
- ⁸⁾ 前掲 4) .
- ⁹⁾ 前掲 3) . 2000 年の国勢調査に基づくとのこと。
- ¹⁰⁾ 前掲 3) .
- ¹¹⁾ フランスの歴史人口学者、家族人類学者であるエマニュエル・トッドは、社会の発展について、それは、識字率の上昇、次いで死亡率と出生率の低下、そして工業化による物質的な富の増大へと進むと述べているので、この表の項目はそれを参考にして選んだ。モロッコとインドネシアは、識字率も出生率もすでにじゅうぶんに近代化に達している。また、トッドが特定した世界の 8 つの主要な家族システムの型によって、世界の各地域の住民の気質・心性、近現代におけるイデオロギーはかなりの程度、説明されるという。この型では、モロッコは内婚制共同体家族とされ（内婚とは自分の属する集団から、例えばいとこを、配偶者を選ぶこと）、インドネシアはアノミー家族（アノミーとはここでは固定した婚姻規則がないという意味から）とされている。世界は出席率の低下とともに核家族化に進んでいるという。ここで紹介したようなトッドの研究については、例えばエマニュエル・トッド、石崎晴己訳・解説『アラブ革命はなぜ起きたか：デモグラフィーとデモクラシー』藤原書店、2011. の石崎による解説がわかりやすい。
- ¹²⁾ 就学年齢を超えて就学している場合などがあり、100%を超えるときがある。
- ¹³⁾ 世界銀行は、「literacy」とは日常生活において、短い簡単な文を読み書きし、理解することのできる人という定義をデータとともに示している。
- ¹⁴⁾ Gontor については、日本でも研究がある。例えば、ウガ・ブルチェカ、柏村彰夫訳「第 9 章 イスラム寄宿塾ゴントルにおけるアラビア語」『多言語社会インドネシア：変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』森山幹弘・塩原朝子編著、めこん、2009, p. 283-293.、西村誠、西野節男「インドネシア社会の近代化と伝統的イスラム教育の対応：ポンドック・ゴントルを例として」『アジア・アフリカ文化研究所』No. 19, 1984, p. 1-24.

-
- 15) シャンティ国際ボランティア会の活動については、同会が編集した『図書館は、国境をこえる：国際協力NGO 30年の軌跡』（教育史料出版会，2011）にまとめられている。
- 16) 田中治彦『国際協力と開発教育：「援助」の近未来を探る』明石書店，2008。
- 17) 『国際交流』（「特集 本が人を動かす!：国際交流の場としての図書館」Vol. 26, No. 3, 2004. 4）と『アジア研ワールド・トレンド』（「特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動」Vol. 12, No. 3, 2006. 3.）
- 18) Ann Curry, Tanya Thiessen, and Lorraine Kelley. “Library Aid to Developing Countries in Times of Globalization: A Literature Review,” *World Libraries*, Vol. 12, No. 2, 2002 Fall (available online).
- 19) この調査は、独立行政法人国立青少年教育振興機構による「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」によって実現した。バルセロナの図書館や読書推進のための政策は、同機構がこのあと公開する報告書中で紹介されることになっている。
- 20) Observatoire National de la Lecture. <http://onl.inrp.fr/ONL/garde> <最終アクセス 2013年3月28日>
- 21) Rebecca Knuth. “Factors in the Development of School Libraries in Great Britain and the United States: A Comparative Study,” *International Information and Library Review*, Vol. 27, Issue 3, 1995. 6, p. 265-282.
- 22) 2013年1月12日に東京大学福武ホールで開催された School Library Initiatives for Asia & Pacific の Forum に Han 氏が講師として招かれていて、研究についてうかがうことができ、後日、資料をメールで送付していただいた。
- 23) 日本の図書、図書館等の対外発信という「ソフト・パワー」については、新しいもので、松本智子「第2章 出版メディアにおける『武士道』と『IQ84』のあいだ」『ソフト・パワーのメディア文化政策：国際発信力を求めて』佐藤卓巳，渡辺靖，柴内康文編，新曜社，2012，p. 219-246. で議論の整理がされている。